

平成19年4月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1-684 TEL0428-23-6859）

青梅でも行なわれていた「摘田」

「摘田（つみた）」は、水稻の栽培法の一つで、種籾（たねもみ）を直接水田に蒔いて育てる方法で、一毛作の排水の悪い深田・湿田で行われます。一方、種籾を苗代に蒔き、育てた苗を田植えにして育てる「植田（うえた）」があります。摘田は、全国的には関東や南九州地方の深田・湿田で広く行われ、種籾を指で摘（つま）んで蒔くので摘田と呼ばれました。史料では、鎌倉市内海家の「播種（はしゅ）之日記」（天和元年（1681））や「大沢村田畑小物成村差出帳」（八王子市加住町・元禄2年（1689））に「つミ田」とあるので、関東地方では江戸時代には行われていた事が分かります。山からしみ出る湧き水を利用する、谷津（谷戸）と呼ばれる丘陵の谷地形やその周辺低地に開かれた田は、深田・湿田が多かったので、摘田が一般的に行なわれ、明治、大正、昭和の初め頃まで引き継がれて行なわれていました。

青梅では、『青梅市の民俗 第1分冊』に「青梅市で摘田が行われていた事は、荒川水系地区の調査で初めて分かった。今井では屋敷前の門田・前田ともいわれる、重要と思われていたであろう田で行なわれていた。木野下では水田の耕地整理がなされた昭和12年頃まで行なわれ、小曾木・厚沢では終戦後の昭和25年位まで散見された。・・・多摩川水系地区では不明である。」と記載されています。

そこで、今井・木野下・厚沢以外の地区で摘田について調査をしてみました。

① 根ヶ布一丁目が在住で昭和3年生まれの男性の話です。

摘田は、年中水のある谷津田でやっていた。なかでも一番奥にある田は水が冷たいので稲にとって一番怖いイモチ病が出易いが、摘田ではイモチ病が出難かった。また粳（うるち）米より糯（もち）米の方が冷たい水でも育ち易いので、「高尾山」という銘柄の糯米を栽培した。植田では、田植えと麦の収穫時期が重なってしまうが、摘田は時期がずれて好都合だった。収穫量は摘田の方が少ないが、一毛作なので味は良く、素性が良い藁が採れて農作業用に重宝した。しかし、雑草抜きや「うろ抜き（おろ抜き）」には手間がかかった。4月初め、「マンガ」で田を耕し、「エンブリ」で平らに均（なら）しておく。4月下旬～5月上旬、「筋引き」で線を引き、この線に沿って1株に10～15粒見当の種籾を点蒔きする。種籾は1週間くらい水に浸け、芽が出る直前の状態にして、灰と畑の土を混ぜて手で摘み易くしておいた。約1ヶ月後、生長した稲株の周りを、傷つけないよう丁寧に手で掻く「うろ抜き」をして、1株10本ほどに整える。うろ抜きをする時期は、早い方が楽であるが、早過ぎると根の張りが不十分で、株が抜けてしまう事がある。稲の生長と雑草の伸びるのが同時なので、除草は4～5

回行なった。小学校2年生くらいになって、稲と雑草の区別がつくようになってから除草を手伝った。肥料は、硫安・「しめかす」という干した魚の粕・大豆粕などを適時施した。収穫の時期は、植田と同じであるが、収量は少ない。水が冷たく日当たりも良くないため、株がほとんど分蘖（ぶんけつ）しないので、穂の数・稲の粒が少なくなってしまう。摘田は昭和15年頃まで行なっていた。

② 野上一丁目在住で昭和5年生まれの男性の話です。

吹上小学校の東側・春日神社の北側にある田で、蚕の世話と田植えの重なりを避けるために、摘田を行っていた。一毛作の、面積も広くはない湿田で、自家用の大切な米を作ったので、粳米を栽培した。「八洲千本」（やしませんぼん）などの晩生（おくて）の種類が多かった。「マンガ」で田起こしをして、大八車と同じような構造の引き棒の中に入って、後ろ側に鉄製のツメが付いた「田舟」を引いて代掻（しろか）きをし、「ユンブリ」で平らに均した。土が見え隠れする位に水を絞ってから、「筋引き」で8～9寸幅の筋を付け、肥料や灰にまぶした種籾を3本指で摘んで、10～15粒見当で筋に沿って蒔いていった。苗が育ってきたら「おろ抜き（うろ抜き）」と草取りを同時に行なう「らち掻（が）き」をした。草取りは、植田より1～2回多くする必要があった。「田刈（たか）り」ともいう収穫は、晩生の種類だった事もあり、麦蒔きを済ませてから行なったので、11月初旬から中旬になることもあった。摘田は、昭和13年頃まで行なった。当時は、吹上小学校から大門一丁目あたりまで一面が水田で、摘田は一般的に行なわれていた。

③ 塩船在住で昭和3年生まれの男性の話です。

摘田は、畑や養蚕の仕事と時期が重ならないため、谷津田の奥にある面積の小さな水の冷たい田で行なった。お米が大事な時代だったので、粳米を栽培した。摘田は、田を平らに均さなければいけないし、草退治が大変なので、広い面積の田ではできなかった。昭和15年頃まで行なった。

以上、摘田は、地域や個人により方法など多少の差異はありますが、青梅市の荒川水系地区ではかなり広い範囲で行われていました。多摩川水系地区については、今回の調査では、摘田は行なわれていませんでした。以下は、駒木野に水田を所有し、東京都青梅地区農業改良普及所技師をされていた昭和4年生まれの男性の話です。「荒川水系では、農家1戸当たりの水田面積が広いので、植田では、田植えと畑や養蚕などの作業が重なってしまうため、摘田を行なったが、多摩川水系では、1戸当たりの水田面積は広くなかった所以、畑や養蚕の作業をこなしながらでも植田で対応出来たのではないか。」

その後、摘田は、食糧増産を奨励される戦時を経て、水田耕作の機械化が進む戦後になり、次第に廃（すた）れていきました。

（文責 三好 ゆき江）

参考文献

日本史広事典編集委員会（1997）『日本史広事典』p.1458 山川出版社

青梅市教育委員会（1972）『青梅市の民俗 第1分冊』p.166～7,202～3

小川直之（1997）『多摩民具事典』p.234～5 けやき出版